様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３６０

研究課題名（和文）ヨーロッパ近代における「宇宙論的神学」の生成について

研究課題名（英文）Research on the cosmotheism in european modern thought

研究代表者
坂本　貴志（Sakamoto, Takashi）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：１０３１４７８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：「宇宙論神学Kosmotheismus」は、自然宇宙そのものを神的と見る態度であるが、無数にある天体の上に啓示が無限に繰り返されるのを許容するか、あるいはこれを非合理と見て創出の一回性にのみ神の介入を認めるかで、論構築が分かれる。前者は「古代神学」に連なり、これはキルヒャー、カドワース、ゲーテの態度である。後者は理神論と関わり、レッシング、シラーの立場である。「存在の連鎖」の観念の基盤となる「ヘン・カイ・パン」は共通のモットーであるが、それは前者の場合、自然科学的探究の対象となる一方、後者では啓蒙主義的な教育の理念となる。

研究成果の概要（英文）：The term ‘cosmotheism’ describes the philosophical attitude toward the universe that is equal with the godhood. This attitude divides further into two theories. 1. The ‘cosmotheism’ of ‘prisca theologia’, which is represented by Ralf Cudworth and Goethe, allows the revelation to occur infinite times above the gloves that exist in the universe without number. 2. The deistical ‘cosmotheism’ on the other hand, which is represented by Lessing and Schiller, considering the theory of ‘prisca theologia’ as unreasonable, allows the revelation to occur only one time by the emanation of God to the universe. Although the both theories hold the motto of the cosmotheism ‘Hen Kai Pan’ in common, which forms the ground for the thought of ‘chain of being’, the former seek to find a trace of ‘Hen Kai Pan’ in the natural scientific brunch, the latter make it for the ideal end of education in the time of enlightenment.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：古代神学　世界の複数性　イシス神　ヘン・カイ・パン　キルヒャー　カドワース　ゲーテ　シラー

１．研究開始当初の背景
基盤研究Ｃ「ドイツ近代とヘルメス的伝統についての研究」において行った研究は、ヘルメス的伝統とはそもそも何かという問いを、古典古代、ルネサンス、近代の歴史的三層を通じて明らかにしつつ、そのヘルメス的伝統の具体的な様相を、これまで関わりの余り指摘されてこなかったドイツ近代の思想家文学者（カント、シラー、ゲーテ等）の中で検討することにあった。その結果得られた認識は、ヘルメス的伝統の一つの核心が、「ヘン・カイ・パン（一にして全て）」という新プラトン主義的なモットーとして表現される、ということであった。十七世紀科学革命の時代に宇宙論が根本的に転回する際には、しかし、この核心の持つ意義が根本的に拡張され、それが、キリスト教の衰退しゆく時代における新たなる神学・哲学の形成に寄与するのではないか、という着想を抱くに至った。宇宙論の革命によって、「神あるいは自然」として捉えられる自然世界の相貌が完全に改まる結果、これに相応した新しい神学・哲学の形成が必要となる。それが、ヘルメス的伝統にある「ヘン・カイ・パン」のモットーの根本的な拡張となって現れる点に着目した。というのも、天動説のプトレマイオス的な古代的宇宙観から、地動説の近代的な宇宙観へのコペルニクス的転回は、思想史文化史的には宇宙世界の中心を巡る視点の交代だけを意味しなかった。ルネサンス期に至るまでヨーロッパ圏を支配したプトレマイオス的宇宙観の中で、地球は有限な宇宙の最も低き場所にあり、塵芥の溜まり場のようなところではあっても中心の座を占めていた。そしてアダムとイブの楽園追放とこの原罪を贖うキリストの降臨というそれぞれ一回限りの出来事は、地球が宇宙の中で占める特権的な中心という位置と一体の関係にあった。しかし近代的な宇宙観の中で地球は宇宙の中心でなくなり、さらに無限性の中の寄る辺なき島となることで、神との特別な関係を失う。これと関連して、無数にあるであろう惑星の住民は、啓示宗教の説く救済といかなる関係を持つのかという問いが生まれる。「複数化した世界」の中では、キリストが無限に降臨するか、地球が宇宙における特権的な中心の地位を再び獲得するか、あるいは啓示宗教そのものに変わって、宇宙の中における人間の意味を説明する哲学が必要になる。「複数化した世界」において神的なるものはいかにして可能かという危機意識が、近代における「宇宙論的神学」の生成となって現れると考えられるのである。

２．研究の目的
本研究は、ヨーロッパ近代における「宇宙論的神学」の生成要因と、展開の具体的な様相、ドイツ近代におけるそのひとつの結実した姿を検討しようとする。「宇宙論的神学」とは、ルネサンス期のコペルニクスによる宇宙観の革命を踏まえて、無限の宇宙全体をひとつの自然世界と捉え、これを唯一神の現れと同一視する哲学である。本研究は、「宇宙論的神学」の生成要因を、ルネサンス後の思想状況の中（ブルーノ、スピノザ）に探り、その展開をケンブリッジ・プラトニズム（レイフ・カドワース）において検証し、さらにその完成した姿を、ドイツ近代の哲学と文学の中（レッシング、カント、シラー、ゲーテ、ロマン主義）で明らかにしようとする。

３．研究の方法
「宇宙論的神学の生成要因を、宇宙論の革命を経験したルネサンス後の思想状況の中に探り、宇宙論的神学の展開をケンブリッジ・プラトニズムの中で分析し、そしてこれを受けたドイツ近代の思想と文学が、新たな宇宙論的神学を形成するときのその具体的様相を明らかにする」のが目的である。そのために以下の三つの研究目標を掲げる。
（１）「宇宙論的神学」の生成要因を、ルネサンス期の思想状況を視野に入れつつ（とりわけ、コペルニクス、クザーヌス）、ジョルダーノ・ブルーノとスピノザにおいて検討する。汎神論としての「宇宙論的神学」の意味をここで明確にする。
（２）　ケンブリッジ・プラトニスト、レイフ・カドワースにおいて、「宇宙論的神学」がヘルメス的伝統と手を結んで、新たなる哲学的神学的な勢力として展開される様を検証し、またここから生じると考えられる自然宗教論、理神論の意義をデイヴィッド・ヒュームにおいて考察する。
（３）　ヘルメス的伝統がカドワースを経てドイツ近代に伝達された結果形成される「宇宙論的神学」の様相を明らかにする。ドイツ近代においては繰り返し、「複数化した世界」における「存在の大いなる連鎖」（ラヴジョイ）の観念が唱えられるけれども、これが「ヘン・カイ・パン」の新しい意味である様を検証する。この連鎖の具体的な姿が、神に等しい宇宙全体となり、それがまた人間の姿となるという、「神人同形説（Anthropomorphose）」が「宇宙論的神学」の核心であるというテーゼを、カント、レッシング、シラー、ホフマンにおいて証明する。

４．研究成果
（１）研究の主な成果
ヨーロッパの近代において「宇宙論的神学」が生成するにあたって、根本的な要因となるのは、「世界の複数性」の概念である。ただし、「世界の複数性」が提起されてからのヨーロッパの思想界における反応は、少なくとも三通り考えられる。
①キリスト教および、あらゆる宗教の可能性の否定
②新しい宗教の構築可能性
③キリスト教の特権性への固執
①は唯物論ならびに無神論を形づくるが、こ

れは本研究の主題ではない。②は、複数世界を統べる一なる神の可能性であり、これが、レッシング、シラー、カント『天界の一般自然史』の議論として特徴的に現れる。その特性は、レッシングの場合、啓示宗教を寓話としてみなし、神の第二位の位格を、自然世界宇宙全体と捉え直そうとする立場として現れる。こうしたカバラ的な発出の原理に基づく世界理解は、「神即自然」として、世界宇宙そのものの外部に神を措定しないスピノザ主義とは異なる。宇宙および自然世界そのものを神とみて、なおその外部にも根源としての神性を一元的に求める態度は、新プラトン主義のそれである。レッシングの場合、啓示はこの発出の段階へと格上げされた上で、従来の啓示宗教は、この発出とその結果ある世界を真理として認識しゆくための媒介、ないしは寓話として捉え直される。レッシングが抱いたこの思想は「ヘン・カイ・パン」としてゲーテ並びにシラーもまた共有することになるが、両者の間の理論的立場には大きな差異があり、それはイギリスの新プラトン主義者レイフ・カドワースの思想を媒介して良く理解される。というのも、カドワースは、「ヘン・カイ・パン」の思想がエジプトを出自とするイシス神において表象されると見て、それがヘルメス的伝統として、古代に発し、ルネサンスを経て近代に伝承されると考えるが、その本質は、地球上における啓示宗教が一元的な根源をもち、異教的な思想と宗教の流れもまたこの根源からの派生として位置づけ可能とするものである。それは「古代神学」とよばれる知的態度として総称されるが、「古代神学」とは、キリスト教における啓示とは別の啓示が唯一あり、これにモーセを含むあらゆる宗教者哲学者が系譜的に連なるとする考えである。たとえば、ラクタンティウス、アレクサンドリアのクレメンス、エウセビオスといった初期の教父たちの多くは、古代の一神教的神学者であるヘルメス・トリスメギストス、オルフェウス、ピュタゴラスによって書かれたと目されたテクスト群が真の宗教の痕跡を含んでいると見なし、これら異教的なテクストはモーセやノア、さらにはアダムに由来すると主張した。あるいは、プラトンを含む偉大な哲学者たちの叡智がモーセに由来するとして、彼らに帰せられる書物やテクストが真理の内容を含むとして信仰される道を開こうとする。「古代神学」とは、キリスト教の啓示とは別系統にある神学的哲学的教説を、ひとつの共通の啓示的根源にまで遡及可能として、両者の間に、親和と乖離の相反する方向性を認めるものではあれ、ひとつの必然的な関係性を認めようとする態度であり、異質なるものを自らの世界観の枠内に一元的に取り込もうとするものである。カドワースのこの「古代神学」において特徴的なのは、同時代のアタナシウス・キルヒャーと同様に、「世界の複数性」を視野に入れた上で、なおキリスト教の啓示宗教として真正性を確保することにある。カドワースにおいて真正の宗教は、地球上における一元的な啓示の根源からの派生として位置づけられ、キリスト教はその根幹をなすと考えられる。啓示宗教がひとつの天体上で一元的に派生して真正性を持つ一方、神の代理人としての「形成的自然 a plastic nature」の、汎宇宙的作用を考え合わせるならば、啓示宗教が宇宙の隅々にあるであろう天体上で無限に生起する可能性もまた否定されないのである。カドワースおよびキルヒャーは、地球上における啓示宗教の一元的発生と「世界の複数性」を共存させる。

②新しい宗教の構築可能性は、この③の立場との関わりで大きく二種に分類される。つまり、「古代神学」的な立場を応用的に保持して、地球上における啓示の一元性を、様々な自然現象の分野の中で確認しようとするか、あるいは、「古代神学」の立場とはかかわりなく、「神即自然」が「世界の複数性」の中で共有可能な神学であり、同時に啓示の無限性を非合理とみて、レッシングのような理神論的な立場をとることになるか、である。前者に分類されるのは、例えばゲーテであり、「根源現象」の名の下にとる自然世界理解のその態度は基本的には、「形成的自然」や「普遍的種子」（キルヒャー）と同様に、この地球上の自然現象に現れ出た神の啓示として理解可能である。ゲーテによって受け継がれる「古代神学」の立場が、植物種の単一的発生として捉えなされるならば、それがアレクサンダー・フォン・フンボルトによって実証的考査の対象となる（「植物の地理学」）。一方で後者に分類されるのは、ゲーテとの協調が、まさに「根源現象」を巡って始まったシラーであり、シラーは「根源現象」を「現象」ではなく「理念」に過ぎないと見て、「神即自然」は発出の原理として理解されるものの―その具体的イメージはイシス神が担い、シラーもまたこのイメージにおいて「ヘン・カイ・パン」を共有する―、少なくとも地球上の人間の認識対象ではなく、人間の理性の発展のための、到達不可能な最終目的となる。シラーにおいては、カント同様に「宇宙論的神学」は信仰として、哲学からは切り離され、それゆえに「古代神学」的立場からは、とりわけ後期に至るに従い、離れるのである。

「世界の複数性」の時代における「存在の連鎖」という、旧来のプトレマイオス的宇宙観とかかわる被造物の階層的理解は、「宇宙論的神学」の時代になお姿を変えて受け継がれる。

③キリスト教の特権性への固執した立場からは、スウェーデンボリの描く「マクシムス・ホモ」が特徴的であり、マクロコスモスからミクロコスモスのあらゆる階層で、神の似姿たる人間の姿が、たとえそれが、太陽系外の住民たちの構成する霊的な組織であっても繰り返される。「神人同形説」は「世界の複数性」の時代においてもなお古典的な姿

をとってここでは現れる。一方で太陽系外の住民たちが、「神人同形説」の中に繰り込まれるための、より合理的な理由付けは、カントの場合、ピュタゴラス的な輪廻転生説に依拠してなされ、他の天体の住民たちは、地球上の住民たちの輪廻した姿であると夢想され、「存在の連鎖」の各項が、時間的な差異を伴って出現するという、「存在の連鎖の時間化」（ラヴジョイ）がここでは見られる。各天体の上に、様々な時代に、（植物や動物など）様々な形態をとって出現する「生命の原理」が発出するところの根源である「非物質世界の巨大な総体」（『視霊者の夢』）は、各「生命の原理」が輪廻転生を繰り返すことにより、神性そのものに近似しゆくと、カントは秘かに期待していると考えられるが、それこそはまさしく古のカバラが抱いた、「アダム・カドモン（始祖の人間）」の再生の過程にほかならない。「神人同形説」はカバラの理論を背景に、人が神の姿に成り行くという目標に向かって、ここではダイナミックに構想される。また、18 世紀半ばに発見された「ヒドラ・ポリプ」の存在とその生態は、「存在の連鎖」の結節点をなすものとしてセンセーションであったが、同時に結節点の存在は、階層そのものを動的に、とはつまり、時間の中で進化したものが折り重なるものとして、「存在の連鎖」をみる観点をもたらした。「存在の連鎖」の観念において重要なイメージである各存在項がもつ照応関係は、シラーの場合、ヒドラ・ポリプの持つ特質－断片が個体を再生し、個体が集合すると個体が機能分化しつつ全体として一個の体（群体）をつくる－が人間存在の理想として捉え直され、そこから美的教育の可能性と、近代市民社会の理想（美的国家）の議論が構築される。ヒドラ・ポリプの存在そのものは、「存在の連鎖」という枠組みを保証しつつ解体するという、アンヴィヴァレントな働きをするが、いわば微分係数ともいうべきヒドラ・ポリプの存在をもって「存在の連鎖」という全体像を思い描き、存在者同士の照応と、「神人同形」の可能性が理念として、そこからは導出されることになる。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の成果としてとりわけ挙げられるのは、単著『秘教的伝統とドイツ近代』（2014 ぷねうま舎）の刊行であり、これは図書新聞による著者インタビュー記事において取りあげられた他、18 世紀科研研究会及び『百科全書』・啓蒙研究会共催の研究会（2014 年 12 月於名古屋大学）で合評会が開催され、またこの書の内容に関連して神戸大学国際文化学研究科へ招聘がなされ、「神話研究史における近代『神話学』の特性の解明」プロジェクト第１回研究会（2014 年 10 月）にて本研究者はイシス神に関する報告を行った。宇宙論的神学を、ヨーロッパ文化に底流する秘教的伝統として紹介した本書は、一般の読者層の、ヨーロッパ文化に対する関心の対象として注目を得るほかに、18 世紀を焦点とする学際的な研究団体、また秘教的伝統を巡るヨーロッパと日本との比較研究に関心をもつ研究グループによって共有される重要な主題であるとあらためて認識された。また本研究内容の一部は、アジア・ゲルマニスト会議（2012 北京）、ヘルダー学会主催の国際コロキウム（2013 東京）にて国際的に発信したほか、さらに今後国際 18 世紀学会（2015 ロッテルダム）、国際ゲルマニスト会議（IVG、2015 上海）他にてアピールしていく予定である。

（３）今後の展望

「世界の複数性」をめぐっては、ヨーロッパから見た異文化の地球人を異星人と見立ててなお実験的な考察が行われた可能性がある。キルヒャーにとって中国文化は「古代神学」による包摂の対象と見なされた。宗教的文化的同一根源性を巡っての遡行は、その際古代エジプト出自のイシス神の図像を鍵として行われ、仏像は「シナのイシス」とみなされる。それはイシス神が持っていた概念的および図像的統合的性格が背景に原因としてあることによると考えられる。その意味でイシス神の概念的図像的な生成発展要因の分析が必要となる。一方で、アジア文化圏の側は、「世界の複数性」および「古代神学」と「ヘン・カイ・パン」の思想をどの様に受け止めたのか。この点に関しての比較文化・思想史的研究が必要となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）

①<u>坂本貴志</u>、キルヒャーの古代神学的宇宙論－「普遍的種子」と「シナのイシス」、19 世紀学研究　9 号　（頁 21 ～ 38）、2015 年、査読有。

②<u>坂本貴志</u>、フェリペ二世のアルキメデス立体－エル・エスコリアル宮殿にみるピュタゴラス主義、高橋輝暁先生停年退職記念論集 1 日独比較文化論考　ASPEKT 別巻 1 （頁 43 ～ 56）、2014 年、査読無。

③<u>坂本貴志</u>、Tarnung und Transbildlichkeit – Die Krypto-Christen in Japan und Mutter Gottes –、アジアゲルマニスト会議 2012 年北京大会論集、査読無、印刷中。

④<u>坂本貴志</u>、Lessing und sein pantheistisches Motto ‚Ἓν καὶ Πᾶν‘、19 世紀学学会機関誌『19 世紀学研究』 7 号（頁 5 ～ 15）、2013 年、査読有。

⑤<u>坂本貴志</u>、Untersuchung über die Verinnerlichung einer Kultur und deren Übersetzung in eine andere am Beispiel Heines sowie über die Heine-Rezeption bei der Modernisierung Japans 、 Akten des XII. Internationalen Germanistenkongresses Warschau、2010　11 巻　（頁 353 ～ 362）、2012 年、査

読有。
⑥坂本貴志、シラーの自然哲学－世界の複数性とイシス神－、日本シェリング協会機関誌『シェリング年報』 20 号 （頁 70 ～ 80）、2012 年、査読有。
⑦坂本貴志、レッシングの「ヘン・カイ・パン」、日本独文学会研究叢書 084 号『ロマン派の時代の危機意識とユートピア』（頁 5 ～ 20）、2012 年、査読無。

〔学会発表〕（計　7　件）
①坂本貴志、一なる女神の多様な現れについて －イシス神をめぐる考察、「神話研究史における近代『神話学』の特性の解明」プロジェクト第１回研究会、2014 年 10 月 31 日、神戸大学国際文化学研究科（神戸市）。
②坂本貴志、イシスとキルヒャー、アタナシウス・キルヒャーシンポジウム、2014 年 3 月 8 日、新潟大学（新潟市）。
③ 坂 本 貴 志 、 Mandala im japanischen Buddhismus Mikkyo und Herders Gedanken über Palingenesie 、 Deutschsprachiges Kolloquium Herder und Japan、2013 年 9 月 16 日、立教大学（東京）。
④坂本貴志、ゲーテとオルフェウス派、ゲーテ自然科学の集い、2013 年 6 月 15 日、駒澤大学（東京）。
⑤坂本貴志、地母神の変容―イシスからマリア観音へ―、日本ヘルダー学会春季研究発表会、2013 年 6 月 9 日、立教大学（東京）。
⑥坂本貴志、神の似姿としての宇宙・国家・人間－シラーのカバラ的神人同形論、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム VII 『再生－進歩－生存：ドイツ思想史における「超人間化」』、2012 年 10 月 14 日、中央大学（東京）。
⑦坂本貴志、Tarnung und Transbildlichkeit – Die Krypto-Christen in Japan und Mutter Gottes –、Die Asiatische Germanistentagung Beijing 2012. Sektion 6: Deutschlandstudien、2012 年 8 月 22 日、北京外国語大学（中国・北京）。

〔図書〕（計　4　件）
①坂本貴志、春風社、虚構の形而上学、2015 年、共著（49～82 頁担当）。
②坂本貴志、青灯社、＜新しい人間＞の設計図、2015 年、共著（94～123 頁担当）。
③坂本貴志、ぷねうま舎、秘教的伝統とドイツ近代―ヘルメス、オルフェウス、ピュタゴラスの文化史的変奏―、2014 年、単著（313 頁）。
④坂本貴志、iudicium、inter: Festschrift für Eberhard Scheiffele zum Siebzigsten、2012 年、共著（23 ～ 37 頁担当）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

〔書評〕（計 1 件）
①坂本貴志、図書新聞 2014 年 9 月 6 日号、シラーの戯曲がもつ建築的な輪郭が浮かび上がる―青木敦子『影像の詩学』書評。

〔インタビュー記事〕（計 1 件）
①坂本貴志、図書新聞 2014 年 7 月 12 日号、シラーが思い描いたダイナミックな世界－坂本貴志氏インタビュー『秘教的伝統とドイツ近代』（ぷねうま舎）をめぐって。

６．研究組織
(1)研究代表者
　坂本　貴志（SAKAMOTO TAKASHI）
立教大学・文学部・教授
　研究者番号：10314783

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
　なし